

半導体製品の検査大手テラプロープ（横浜市）が、芦北町に九州事業所を開設して10年目を迎える。家電やパソコンの半導体検査からスタートした拠点は、スマートフォンのカメラ用イメージセンサーなどと成長分野へと対象を拡大している。設備増強や開発機能も強化し、目まぐるしく変動する市場で存在感を高めている。

（原大祐）

半導体検査大手テラプロープ

「開発力を磨いて付加価値の高いサービスを提供し、幅広いニーズに対応する必要がある」。九州事業所でフル稼働を続ける検査装置を前に、事業所トップの池内貴之執行役員が強調する。同社は約12億円を投じ、4月から九州事業所の検査装置を約90台から100台強に増強。技術者も1・5倍に増員し約30人体制にする。イメージセンサーの受託体制を構築し、検査手法の開発強化を進める。

同社が担う半導体の検査工程は従来、半導体メーカーが自ら手掛けてきた。ただ、設備投資や検査法の開発費などを抑えるため、外部委託が進む。背景にあるのが、海外勢とのコスト競争の激化だ。

世界半導体市場統計（WSTS）によると、2013年の半導体製品の世界市場は約30兆円。10年で1・5倍に伸びているが、世界をリードしてきた日本の半導体は生産の主体が徐々に海外へと移り、国内市場は3兆3964億円と約25%縮小している。

こうした中、国内メーカーは競争力の高い得意分野への「選択と集中」を推進。県内に主要拠点があるソニーのスマホ向けイメージセンサーや、半導体大手ルネサスエレクトロニクスの車載用マイコンなど世界トップを誇る製品

芦北町に進出10年 事業多様化 設備、開発強化で受注急増



フル稼働を続ける半導体の検査装置。イメージセンサーの検査需要に対応するため、設備増強を進める

＝芦北町のテラプロープ九州事業所

群が国内の市場を下支えている。

テラプロープも事業環境の変化に対応してきた。06年9月開設の九州事業所は当初、家電用の半導体などロジック（理論回路）の検査拠点だったが、09年にはイメージセンサー分野に参入。昨年5月には車載マイコンの検査拠点として国際規格を取得し、多様な受注体制を整えてきた。

これに伴い九州事業所の受注が急増。同事業所を含む同社のシステムLSI事業の14年3月期の売上高は56億4600万円と、上場から4期目で3倍超になった。

同事業所には、検査装置約400台分のスペースがあり、今後もさらなる投資が見込まれる。同社の渡辺雄一郎社長は「九州は検査と技術開発の拠点で、今期も約3割の受注増を見込んでいる。顧客の動きをみながら、台湾の子会社も含め、設備増強を検討したい」としている。

Q ズーム

テラプロープ 半導体製造大手エルピーダメモリや半導体検査装置製造大手アドバンテストなど4社が出資して2005年8月に設立。10年に東証マザーズ上場。芦北町を含む国内3拠点、海外1拠点を展開。14年3月期連結の売上高は216億6800万円。